

1 埼玉県で発生した豚コレラ (CSF) の防疫措置

熊谷家畜保健衛生所

○留場 寛子・山品 恒郎

I はじめに

埼玉県内では令和元年9月から11月にかけて、5例のCSFが発生した。その際の発生農場で行った防疫措置の概要と課題について報告する。殺処分頭数は5例で合計7,621頭、殺処分にかかった日数は1日～4日、防疫措置の完了には3日～8日を要した。農場内で動員した作業員数は延べ2,430名、他部局からの応援獣医師数は延べ145名であった。家畜防疫員が1班13～18名で作業に従事した。1、2例目は防疫措置完了まで全員が交代無しで作業し、3例目以降は1日3交代制で作業に従事した(表1)。

表1 防疫措置の概要

	殺処分頭数	殺処分日数(時間)	防疫措置日数	農場動員作業員数	応援獣医師数	発生農場防疫員
①秩父市	924頭	2日(26h)	4日	420名	19名	24h体制 13～18名
②小鹿野町	1,307頭	2日(25.3h)	3日	550名	33名	↓
③神川町・本庄市	2,243頭	4日(73.5h)	8日	900名	24名	交代制 14名
④本庄市	994頭	1日(23h)	3日	240名	15名	↓
⑤深谷市	2,153頭	2日(48h)	7日	320名	54名	↓
合計	7,621頭			2,430名	145名	

II 殺処分方法・搬出動線

1例目では育成豚以下の子豚はガス殺、肥育豚以上の大きさの豚は1、2頭を豚舎出入口まで追い出して電殺・薬殺を行った。死体はフレコンバックに詰めた後移動させ、埋却地へ搬出されるまで農場内に集積した。

しかし、ガス殺は死亡するまで時間がかかること、電殺は追い出しに時間がかかるなどの問題が判明したため、2例目以降、殺処分方法や動線を変更した。



図1 豚房内での殺処分

4例目では哺乳豚だけガス殺を行い、他の豚は豚房内およびストール内で電殺した(図1)。電殺後は死体を豚舎外に人力で引き出した後フレコンバックに詰め、埋却地へ搬出されるまで農場内に集積した。

雄豚は、1、2例目ではストール内に追い込んだ後、マフロパンで鎮静し電殺したが、鎮静に時間がかかるため、3例目以降はストール内で電殺を行った。

発生が続くにつれ、殺処分を少人数で行える方法に変更していき、防疫措置にあたった。

III 防疫作業において発生した問題

農場の構造が防疫作業に影響を与えた。

2 例目（図 2）では山間地域に豚舎があり、平坦な場所が少なかったためフレコンバックの集積場所が豚舎から遠くなり、搬出に時間がかかった。

3 例目（図 3）では農場内の動線が中央の狭い通路 1 本に限られていたため、重機が一台しか使用できず、フレコンバックの搬出が難航した。さらに敷地も狭く、フレコンバックを多く集積することができずに埋却地への搬出が滞ることがあり、豚の詰め込み・搬出作業に影響した。

5 例目（図 4）では豚舎が密集しており、重機の使用が制限されたため、フレコンバックへ詰め込むために死体を人力で豚舎外まで搬出しなければならず、時間を要した。



図 2 2 例目の農場見取り図



図 3 3 例目の農場見取り図

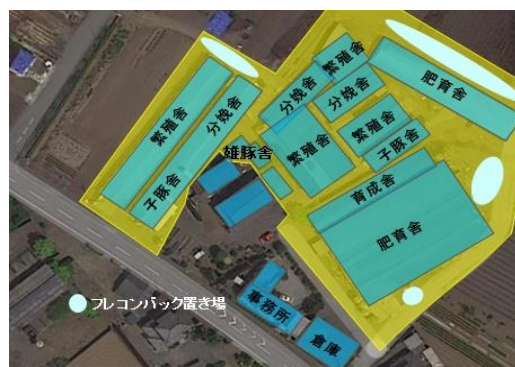


図 4 5 例目の農場見取り図

自然災害による影響も受けた。

3 例目では台風 19 号による豚房の泥漿化が発生した（図 5）。泥漿化した繁殖豚舎は簡易構造の堆肥舎を活用していたため、台風により屋根が破損し雨水が入り込み泥漿化が起こった。そのため人が豚房の中に入ることができず、殺処分が難航した。

その他にも防疫措置に必要な資材の調達の遅れや、現場で指示を出す家畜防疫員の不足などの問題も発生した。



図 5 豚房の泥漿化

IV 課題と対策

1 課題

共通する課題として以下の3点が挙げられる。

(1) 作業マニュアル通りの対応が困難

ア農場の立地や構造の違い

3例目、5例目のように豚舎間の通路幅や農場の敷地が狭いこと、2例目のように農場内でフレコンバックを置ける場所が遠いことなど様々な条件により、搬出作業に時間を要した。

イ豚舎内の電源や給水設備の不足

電殺機に利用できる電源、夜間の照明、洗浄や消毒に用いる水道の不足等で、作業効率が低下した。

ウ自然災害の影響

台風によって豚房の泥漿化が起こり、殺処分が難航した。

(2) 資材調達の遅れ

発生が週末、祝日に重なってしまったことや、事前に準備していた資材リストに記載がなかったフレコンバックなどの資材が届かないトラブルも発生した。物資が発生農場に届くまで時間がかかり、殺処分開始の遅れなどが見られた。

(3) 発生農場での家畜防疫員の不足

発生農場での家畜防疫員は、農場内での殺処分や搬出導線を把握・共有し、一般作業員や応援獣医師へ指示出しに専念することが理想であるが、仮設テントの設営、機材準備等の雑務に追われ、本来の業務に支障が生じた。

また、3例目以降、家畜防疫員は1日3交代のシフト制に変更したが、これにより農場内に常時いる家畜防疫員が1、2例目に比べ極端に少なくなってしまった。さらに、家畜防疫員と応援獣医師のシフトがずれていたため、情報共有がうまくできず農場内の作業効率が上がらなかった。

2 対策

(1) 作業マニュアルの作成

種々の農場に対応できる作業マニュアルを作成する。

(2) 必要資材リストの作成

必要資材リストの作成に加え、備蓄を充実させること、また民間企業等との資材調達協定を締結することも重要であると考え。特に備蓄に関しては投光器や動力噴霧器など、発生後すぐに必要になる資材を中心に準備する必要がある。

(3) 応援獣医師との連携強化

家畜防疫員と応援獣医師のシフトを調節するなど、応援獣医師を家畜防疫員と同じ立場で作業ができるように他部局との連携を図ることが重要であると考え。

最後に日本国内では引き続き CSF が、近隣国では ASF の発生が続いている。今回の発生を教訓に、より迅速に家畜伝染病に対応できるよう防疫体制を検討し、整備を進めることが重要である。